

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-28

特集私たちのみた世界 : アジアのプロフィール : 2. The Land of Smiles : バンコク

青木, 千枝子

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

1967-03-21

た方が、気持がよいこともあるのであろうか。

ボンベイ市立の遊園地としては、ミルクコロニーにいく途中の人里はなれた丘の上に、広大な敷地をもつものがある。そこでは少しも貧者に妨げられず、裕福な親たちに見守られて子供達はのびのびと遊園の施設を楽しんでいた。同じ市立でも、市街地の外れには2、3百人用の共同洗濯場もある。一見それと分かれぬがそこでも完全な分業組織が確立されている。すなわち洗濯物を運んでくるだけの人、洗うだけの人、干すだけの人、配達をする人などである。これを知つて改めてそのあたり、自転車に山のような衣類をつんで行き交う人々を見直したものである。

クイーン・ネックレスのマリン・ドライブウェイにおいても、たゞ防波堤によりかかつているだけの若者たちが海岸そいに長い列をなしている。その4~5mほどもある広い歩道の片隅では、一鉢ほどの売るものを並べてしゃがみこんでいる7才ぐらいの子供たち。ともかく港町ボンベイには終戦当時の上野の山のように、インドの各地から食いはぐれた浮浪者が何となく集まるとのこと。それにしてもあちこちに展開する放置されたままの広大な土地。イギリス資本による臨海工業地帯はあるのに、若者たちの働く場所をもたないボンベイ。それでも兵隊になれる程の人は選ばれた階級の子弟であり、ベトナム派兵も行なわないインド。或いはそこにガンジー首相の心意気もあるというのであろうか。

そういえば四億の民をかかえたインドでは最近政府による家族計画指導が徹底しているとも聞いた。なるほどほたいに赤丸をつけている程の婦人では、三人の子持ちというのを殆んど全くみかけなかつたのも印象的であつた。それがバリでみかけた若い夫婦が子供三人づれなのと妙に対照的に思い出される。

大家族制といひ、カースト制といひ、今日のインドの現実をなさしめたすべてではないと思ふけれど、やはりその前途は多難であると思われてならなかつた。

東京都中野区立第八中学校 福士 稔子

2 . The Land of Smiles -- バンコク --

The land of smiles と称されるタイ国は、メナムチャオブラヤ(メナム川)の沖積平野の豊かな水田にみる米を唯一の産物とする農業国であり、「王様と私」に描き出された東洋の神秘的な王国というイメージとワット(寺院)とクローン(水路)に満ちた美しい首都クルンテブ(バンコク)とによつて、観光客をひきつける観光国でもある。さてそのsmileとはどのようなものであろうか。

雑踏のない観光都市 — 騒音とわい雑な活気に満ちた東京と香港をあとにたどりついた夕暮のバ

ンコク郊外のドンムアン空港は、これが観光国の玄関かと驚くほどの静けさだつた。空港ビルの玄関の蛍光灯にむらがる虫や、生まあたたかい土の匂いのしみた空気から受ける印象は滞在中にさらに深められて行つた。

バンコク市内観光の一日は早朝の水上マーケット見学に始まる。18世紀にメナム河口から30kmの地点に建設されたバンコクは低湿地であるため、かつては水路が重要な交通路であつた。すでに近代的都市建設が進んだ市内では、ビルが建ち並び水路を埋め立てた道路に自動車を通つているが、市街地をはなれた周辺の農村地帯では、まだ水路を利用している。メナム川岸の支流と水路が交錯する水田地帯に、毎朝他地域から農産物を売りに来た小船が集つて開かれる市が名物の水上マーケットである。スゲ笠をかぶり色とりどりのブラウスとサロンを着けた女たちがたくみに小船をあやつる中を、観光客をのせたモーターランチが走る。小船はランチの近くに寄つては来るが、女たちは観光地特有のよび声はかけず静かなほほえみを口元に浮べるのみ。兩岸の農家の河面に張り出した床の上では、主婦たちが買物や炊事の仕度、洗濯に余念がない。子供たちは床にたむろしたり水浴びしながら、自分たちにカメラを向ける観光客を、無表情な目で眺めている。これらの農家の背後には椰子の林をとおして水田が見られる。

この観光ルートの終わりは、再び本流に出た地点のワットアルン（暁の寺院）である。高さ70mの陶器をちりばめた尖塔の中腹に立てば、川をへだてた対岸には王宮をはじめ数々の寺院の屋根と尖塔が輝いている。

まひるの市内の有名寺院。ワットブラケオ（エメラルド仏陀の寺）ワットポー（巨大なねはん像）ワットトリミット（黄金仏陀）ワットベンチャマボット（大理石の寺）などは、カラカラの空気と輝く太陽に、極彩色の華麗な姿をさらしている。境内には影を落す木立は一つもなく、日本の寺院の持つうす暗い幽玄さなどみじんも感じさせない。何というむき出しな仏陀への賛辞の表現であろうか。境内には物売りの店があり、また併設された学校の子供たちや黄衣の僧侶たちが行き来をし、わずかながら観光客もいるのだが物音が聞えない。すべての音は色彩の中に吸収されて行つてしまうのだろうか。外界から切りはなされて、真空のガラス箱の中に自分が立つような心地にさせられる。

屋下りのショッピングセンター、ニューロード。どこの店も同じようなタイシルク、スターサファイア、プリンセスリング、銀細工、チーク細工、革製品、ヌード人形、安物は竹のガラガラヘビ、深いひさしの下のガラスケースにこれらがひつそりと並び、客の姿はない。香港、シンガポールという2大買物市場にはさまれた位置のためか？ 町を行くのはサロンの女とはだしの男。客まぢするタクシー運転手のけだるそうな顔。

バンコクの夜。古典舞踊のシヨウをラマホテルに見に行けば、冷房のきいたホールの客の半分は

日本人。単調な民族楽器のメロディーにのつて、きらびやかではあるがしわの目立つ衣装の踊り子は指先をくねらせて踊る。流調な英語で解説するタイ娘の無表情なすまし顔。香港のショウでも感じた事だが観光客相手のショウとは何とらびれて悲しいものか。偉大な王を賛美する踊りも、ただ珍しい衣装をつけた人形のバントマイムに過ぎない。

微笑の国の住民たち - 豊かな農業生産物と貧しい農民、インドナ半島の米作国はこのように対立的な印象をもつて語られるが、この国も例外ではない。バンコク東郊の水田地帯にある農家を訪れたところ、水田地帯ながら高畝を築き葉菜類を栽培するいわゆる近郊農業経営において、2 haの耕地から得られる年間粗収入は3,000バーツ(約6万円)、小作料は年700バーツ。それでは12人家族は生活できないので養魚を副業としその収入が3000バーツ。あわせても12万円でしかならぬ。同じ程度の米作農家では農業粗収入は大差はないが、小作料が50%高く結果的には副業にたよらざるを得ないという。これらの農民の地主は華僑である。

農家の内部をみせてもらうと、10m²の木造でニツパヤンでかこまれた家は、水路に面した東側の部分のみ高床となつており、残りは広い土間である。寝室らしきところにカヤが釣つてある。土間には2つばかりの椅子のほか家具類は見当らない。たつた一本の蛍光灯、ラジオがそぐわない感じだが、養魚場への揚水に用いる発動機つき揚水機や、水道もある点ではタイの農家の中では中以上に属するという。

自然の恵みをうけた豊かな農産物は、食料品の低価格となつて低賃金労働者と貧しい農民の存在を放置し、一年中ほぼ一定の気温は、衣と住を簡素化させこれまた収入の少なさを放置させる。それが外国人をして貧しいがみじめさのない微笑の国と言わせるのか。

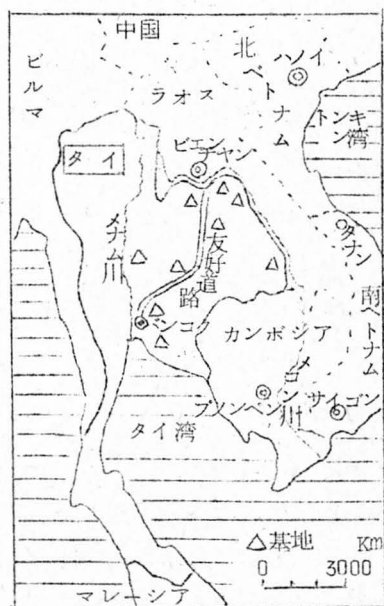
帰り道、夕やみの中にそこだけ明るい部落人口の寺院に上つてみると、花を供えた極彩色の棺を前に農民が集まつている。生前から立派な棺を用意し、死後は数日に及ぶ盛大な葬儀を行なう風習、暑さの中で異臭を発する棺を前にした酒盛り。まこと仏陀の国らしく仏の仲間入りをするには儀式を必要とするのであろう。しかしこの費用について考えた時、何ごとも仏陀を中心として死後の安楽を祈り、積徳の行為として托鉢という名の強制寄進をいぶかりもせず、貧しい中から死に対しての備えをすることを当然とする農民たちや、ならびにこの習慣を打破することの出来ないアジアの農村共同体のがんじがらめのきずなに対して、悲しみとも怒りともつかぬ感慨が湧く。

農家の父親は子供は農民にしないと叫ぶ。こうして町へ出て来た若者たちの生活はどのようなものか。東南アジア各国において経済上に占める華僑の勢力の強大さはタイ国においても例外ではない。しかしながらナショナリズムの抬頭により、ビルマ、カンボジア等で華僑の経済活動の制限が敷かれ始めたが、タイ国では華僑の流通過程における勢力を取りしめる協同組合運動がある程度でしかない。その上約370万人といわれる華僑のうち90%近くはタイ国籍を獲得しており、かつ

ては商業資本のみであつた華僑資本が産業資本に転化する動きを見せているという特徴をもっている。バンコクのニューロード西北方のヤハラジロードは、いわゆる中国街で衣料、雑貨の商店の他、金行と称する金銀細工店がある。金行は貨幣価値の変動が激しい国の貯蓄面を支配している。ヤハラジロードからメナム河畔にむかう、問屋街、倉庫街そして河畔の冷凍エビ工場は、勿論華僑資本。10才にも満たないタイ国人の女の子たちが、一心にエビの皮をむいている。義務教育制が実施されている現在も数多い未就学児童たちである。つまりバンコク市内に住むタイ国人たちは、幼い子供たちまで働かせねばならぬほど貧しい人が多いのだ。コンチュン(華僑)を誇り、コンタイ(タイ国人)を恥じる風習。町へ出かせぎに来た女の職業の一つであるアヤ(女中)食事ぬきで月給200~300バーツ。農村青年のあこがれは華僑経営の会社に入ることかまたは中古の車を買ってタクシーの運転手になること。後者はうまく行けば1時間20バーツの相場でも月収数千バーツになる。この国では農民の子供が苦学して大学まで行くなぞ考えられないのである。幼い時から教育を受ける機会を持たないからだ。一方には学費に通い長じては海外留学をし、政治家になるひとにぎりの王族、貴族、富豪たちの子弟。この矛盾を仏陀の微笑と色彩にみちた真空の中に消滅させて、卑屈な微笑を浮かべている町の間。金が欲しいくせに少しでも客が強く出ればまけてしまふ運転手や商人。少しのチップに喜んで税関を素通しさせる航空会社の男。また近代的なビルとともに入り込んで来た外国人と腕を組み、伝統のサロンをワンピースにかえ、マニキニアした指をもつ娘、こんな娘たちとコココーラ、バヤリスオレンジ、ホンダドリームに象徴される新しい東南アジアの顔が、すでにこの国に出現し始めている。

この現実の前にも早や神秘的な王国は光を失ない、近代化されぬまゝ保ち続けて来た王国の地位は、新しい外国の勢力におののかされているのだ。それは市内につきつぎと建設される無表情な国籍不明の四角いビル、水路を埋める広い道路、道路の果てに建設される基地。これらは近代化の象徴であるとともに、新しい従属形態の象徴でもある。建設の槌音は、滅び行く王国のすゝりなきであり、壮大な仏陀への賛歌は、現実にはあきらめと無気力さとの入りまじつた微笑にかえられてしまつたのだ。

朝日に輝くワットアルンの尖塔に別れをつけ、空港行きのリムジンに乗れば、北部のラオス国境へ通じる道路上には軍用トラックの列が通り、軍用飛行場ではパラシュートの降下訓練が続けられている。1966年1月8日、ベト



タイ国内の軍事施設
(朝日ジャーナルによる)

ナム正月休戦が解かれる前日であつた。

東京慶大才一高等学校 青木千枝子

3 . タイガー・バーム・ガーデン - 香港 -

眼下に広がる地図—香港—。飛行機の翼がキラリと光つた。林のように高いビルディングがぬきん出ている。青い海に浮ぶ大小の島々……。皇領植民地 (crown colony) 香港は香港島、九竜、新界及び付属島嶼からなる。香港島は東西18 Km、南北3~9 Km、75 Km²の面積を持ちその南岸は樹木のない火山質の丘陵が続き、アバデインの漁港というよりはむしろ、近年高層ビルの住宅が続々建設され、海水浴場やゴルフ場を備えたレジャー・センターとして賑わいを見せている。北岸のヴィクトリア・ピークからヴィクトリア港に至る一帯は行政、金融、商業、貿易のセンターで、とくに総督官邸のあるセントラル地区は、香港の動脈となつている。九竜のオールド・カオルーンは長い間軍隊の駐屯地・訓練場であつたが戦後の新都市計画によつて工場地帯として生まれ変わり、新界をつなぐ主要道路はショッピングの中心地として賑わつている。ここに啓徳空港がある。そして新界、ここは香港のイメージとはかけ離れた古々しい田園地帯である。樹木もまばらな丘陵地帯が広がり、栽培農業が営まれている。

1966年1月、明るい陽ざしがさんさんとふりそそぎ、ふり上げばコバルトブルーの空が限りなくまぶしい。カラリとした道路の片側に2、3台のバスが並んでいる。ここはタイガー・バーム・ガーデンである。バスの窓からチラリと顔が覗いた。バラバラとかけ寄る数名の子供達、年はいずれも8~12、3才位であろうか。よれよれのブラウスと上着、つんつるてんのズボン、ズックをはいている。男の子も女の子もいる。彼らは皆、同じように肩からみやげもの



香港主要部